

“食ベログ・ショック”に襲われた「サイバーエージェント」の苦悩

実業界

4

The Analytical
Magazine
for Economics

2012

毎月1日発売

昭和27年2月28日第三種郵便物認可
毎月1回1日発行 平成24年4月1日発行 第998号

「三菱電機」

過大請求問題で先細る
防衛ビジネスの命脈

- 「キヤノン」御手洗
“社長復帰”で吹き荒れる
リストラ旋風
- 三度目下方修正で露呈
「任天堂」円高以上に
深刻な主力商品の不振



Z O O M

期待の商品・注目のサービス

U P

オプトロム

省エネ・省コストの次世代照明「CCFL」の普及を本格化 省エネ蛍光灯「E・COOL」の新製品を量産

オプトロム（三浦一博社長）が次世代型省エネ蛍光灯「E・COOL」の製造・販売を加速化している。

E・COOLは、CCFL（冷陰極管）と呼ばれる蛍光灯の一種で、CCFLそのものはけつして目新しいものではない。パソコンのバックライト、コピー機やファックスなどの読み取り光源、出入り口の誘導灯などに使用されている。最近では、地デジ化で販売が急増した薄型テレビの光源にも使用されている。

それが今、次世代型の省エネ蛍光灯として大きな注目を集めている。

省エネ照明といえば「LED」が話題になっているが、実は、CCFLの方がはるかに優れた省エネ蛍光灯といえるのだ。まず、電気代や製品寿命はLEDとほぼ同じで、従来の一般蛍光灯に比べると電気代は二〇〜四〇%削減、四万時間という長寿命で取替えコストが抑えられる。しかも、製品価格はLEDの半分から三分の一程度安い。

さらに、特性の違いも見逃せない。たとえば光が真下に集中するLEDはスポットライトには適している

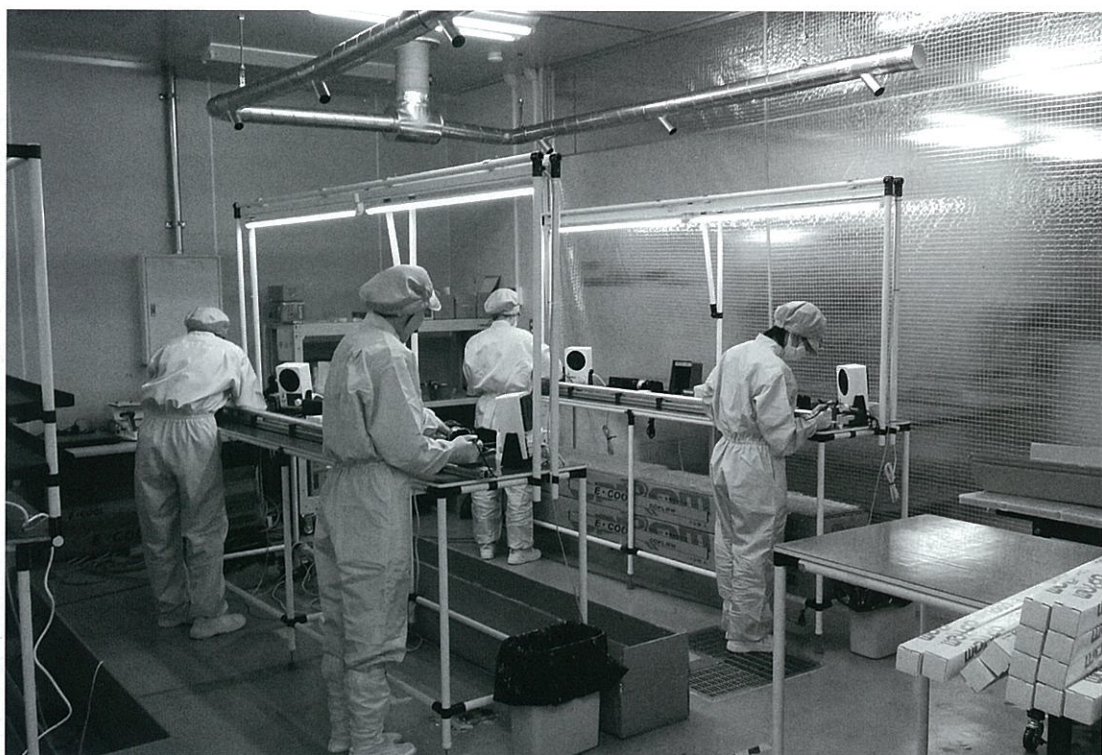
が、室内照明には全方向にムラなく発光するCCFLの方が適している。また、LEDには色の再現性に問題があり、赤色がくすんで見える。CCFLの明かりの元では色の再現性は自然に近い。また、LEDには明かりにちらつきがあり、チラつきの少ないCCFLの方が目に優しい。こうしたLEDに比べて

光の品質が高く、なおかつ高い省エネ性能があり、製品価格はLEDよりもはるかに安い「E・COOL」

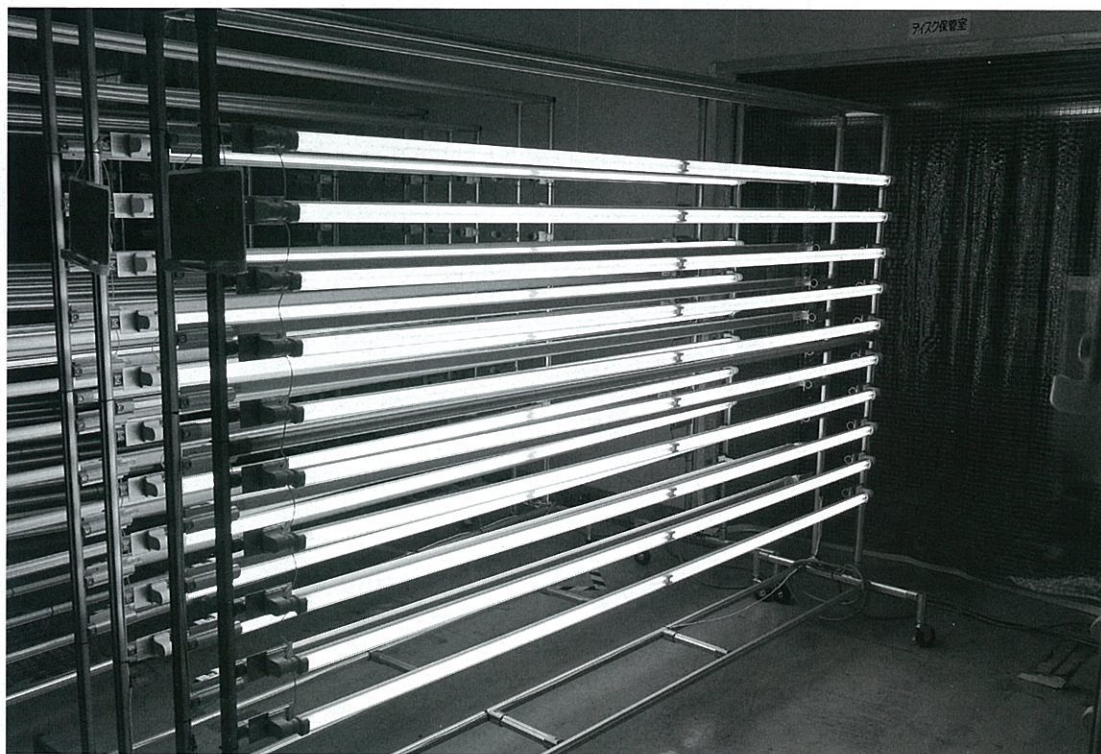
だが、これまでは二〇ワットと四〇ワットの直管蛍光灯しかなかった。そこでオプトロムでは、昨年十二月から仙台市にある同社本社工場で新製品の「一一〇ワット」タイプを量産、今年一月から発売を開始している。これにより、大規模工場や大型商業施設などへの導入も期待でき、被災地に本社を構えるオプトロム

が、被災地復興の牽引役になることも期待されるだろう。なお、一一〇ワットタイプは電源電圧が二〇〇／二四〇Vで、一〇〇V使用の製品の開発・発売も予定しているという。また、一一〇ワットタイプの寿命は約十年。

二〇ワット、四〇ワット、一一〇ワットと三タイプをラインアップした省エネ蛍光灯「E・COOL」。省コストが求められる中で、次世代型照明はLEDだけではない――。



仙台市にあるオプトロムの本社工場で量産を始めた省エネ蛍光灯「E・COOL」の新製品 110 ワットタイプの製造工程。



LED に比べると、光のムラ、ちらつきがなく、色の再現性に優れている「E・COOL」。光の品質の高さから美術館などにも導入され、長寿命のため点灯時間の長いコンビニなどでも導入されている。